HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	S. ブラックバーンの準実在論と道徳の自然化［全文の要約］
Author(s)	小林, 知恵
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第14749号
Issue Date	2021-12-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/83849
Type	doctoral thesis
File Information	Chie_Kobayashi_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　氏名：　小 林 知 恵

学位論文題名

S. ブラックバーンの準実在論と道徳の自然化

本論文ではイギリスの哲学者 S・ブラックバーンのメタ倫理学理論である準実在論（quasi-realism）について、この理論が彼の道徳哲学の中心課題である「道徳の自然化」をどのようにして達成するのか、そしていかなる実践的含意を有するのか、という観点から検討する。本論文では準実在論が包摂するメタ倫理学上の諸考察の内実を明確化し、それらの諸考察と準実在論が支持すべきテーゼ群との間に整合性が成立するかを検討する。この過程を通じて、実在論／反実在論、認知主義／非認知主義といった二項対立を超えて、道徳がもつ主観的側面と客観的側面の両方を捉える試みとして準実在論を解釈する。

本論文は六つの章から成る。第一章では、ブラックバーン道徳哲学の中心課題とその全体像が描き出される。存在論的な哲学的自然主義に立脚するブラックバーンにあっては、この立場と整合的な実践理解を構築するという意味での「道徳の自然化」が中心課題として設定される。倫理的思考が機能する仕方に着目し、そのプロセスを多面的に説明するというアプローチにより、彼自身の応答として結実したのが準実在論である。第一章では準実在論が満たすべき要件を、ブラックバーンの道徳実在論批判と彼が道徳実在論に賛同する点を手掛かりとして、(1) 形而上学的自然主義、(2) 道徳的真理の非対応説、(3) 道徳的言明の真理適合性、(4) 道徳的真理の心的独立性、(5) 道徳的推論の基準という 5 つのテーゼとして析出する。そして、ブラックバーンが自身のメタ倫理学理論を構築する際に、(Ⅰ)生成論的考察(道徳的判断はどのようにして生じるのか)、(Ⅱ)意味論的考察（道徳的言明は何を意味しているのか)、(Ⅲ）真理論的考察（道徳的判断は真理値を持つことができるのか、またそれはどのようにして正当化されるのか）の三つの考察課題への応答を経由していることを指摘する。

第二章から第四章では各考察と上述のテーゼ群の整合性について考察する。第二章では、ブラックバーンの（Ⅰ）生成論的考察に対応する投影説が、準実在論が支持すべきテーゼ群とどのような関係にあるのかについて検討する。投影説にあっては、私たちが道徳的判断を下す過程は、実際には実在しない道徳的性質を事物に投影することによって、あたかも当該の判断に対応する道徳的性質が実在するかのように語っていると説明

される。このような投影説による道徳的思考の生成プロセスの説明はいかなる道徳的性質や道徳的事実も措定しないため、投影説は【(1) 形而上学的自然主義テーゼ】と整合的である。そして残り四つのテーゼと投影説は主題を異にすることから、それぞれ独立して主張可能である。さらに本章では、投影説に向けられる批判のうち、N・スタージョンが提起した「意味に基づく論証」と「説明に基づく論証」、そして投影説が責務の感覚を弱めるのではないかという批判に対するブラックバーンの応答を検討する。

第三章では、（Ⅱ）意味論的考察に対応する表出主義が主題となる。情動主義や指令主義の系譜に位置する表出主義は、道徳的判断は行為や人物に対する肯定的あるいは否定的態度のような非認知的な心的状態を表出していると見なす。道徳的実在に関する主張を含まない表出主義は【(1) 形而上学的自然主義テーゼ】と独立に主張可能であり、道徳的真理を主題とする【(2) 道徳的真理の非対応説テーゼ】、【(3) 道徳的言明の真理適合性テーゼ】、【(4) 道徳的真理の心的独立性テーゼ】のいずれとも、さしあたり概念的な不整合をきたしていない。しかし、【(5) 道徳的推論の基準テーゼ】については、推論規則の適用可能性の観点から表出主義に疑義を呈するフレーゲ・ギーチ問題として、表出主義にとって大きな説明上の負担となる。この問題をめぐってブラックバーンは複数の応答を試みているものの、決定的な応答の提示には至っていないと評さざるをえない。また、この問題を解決する選択肢としてハイブリッド表出主義に注目が集まっているが、ブラックバーンの理論内部の整合性を保持するという制約と、ハイブリッド表出主義自体が抱える難点から、ブラックバーンが自身の表出主義を排してハイブリッド表出主義に転向することは魅力的な選択肢ではないと論じる。

第四章では、（Ⅲ）真理論的考察に対応する道徳的真理の構成説に目を向ける。この立場にあっては、整合説と類似した「真理の構成」というアイディアを経由することによって、道徳的判断の真理適合性や道徳的正当化を認めることは可能であると主張される。したがって、理論自体の妥当性を脇に置くならば、ブラックバーンの真理論的考察は前述のテーゼ群のうち道徳的真理を主題とするものをすべて包摂するものである。さらに、本章では真理論的考察をめぐってブラックバーンの著作間で転回が生じているという解釈と「這い寄るミニマリズムの問題（creeping minimalism）」に対して反論を試みる。前者については、ブラックバーンのテキストに基づき、彼が一貫して真理述語に実質的な内容を認め、真理の整合説に近い立場を採用し続けていると論じる。また、後者については、「真にするもの（truthmaker）」と「真にするという関係（truthmaking relation）」の区別に基づき、準実在論が与する真理述語解釈を再構成することによって、準実在論の独自性を示す。

第五章では、相対主義の挑戦に対する準実在論の応答を検討する。ブラックバーンは相対主義をめぐる懸念に対して、感受性にかかる欠陥の特定を通じて道徳的意見の客観性や信念形成プロセスの信頼性を評価することで、対立する意見の優劣を決するという方途を提示する。この応答は、競合理論が直面する実質的な真理概念と主体のあり方や

開花反映の多元性の間に生じる緊張関係を生じさせないという利点を有すると思われる。第五章の後半では、より強固な心的独立性を要請する批判としてストリートが提起したダーウィン的ジレンマをめぐって、準実在論の擁護を試みている議論を検討する。このジレンマを構成する前提に準実在論が与していないとする先行研究の応答はジレンマ自体の解決には貢献しているものの、感受性の欠陥を見極める実効的な方法を特定するには不十分であり、規範倫理学上の考察へと踏み込むことが要請される。

第六章では、議論の射程を一階の倫理学（規範倫理学）にまで広げ、実践的含意を有する理論として準実在論を解釈することを試みる。具体的には、メタ倫理学上の考察に従事する際に立つ理論的観点と一階の倫理的考察が行われる熟慮的観点を、ブラックバーンが明確に区別していることを確認した上で、準実在論と親和的な規範倫理学理論として彼が提案する動機帰結主義について考察する。ブラックバーンは道徳の社会的機能に依拠して投影説と動機帰結主義の組み合わせが自然であると評する一方、両者の間に本質的な結びつきはないと主張する。これに対して、本論文では彼の真理論的考察で示唆されている感受性の評価実践に関する見解に基づき、準実在論と動機帰結主義の架橋可能性を示し、準実在論が実践的含意を有することを提示する。また、感受性の直接的な産出物が態度や動機といった心的状態であることに依拠して、対抗理論につきまとう問題点の回避という点だけでなく、準実在論との整合性という観点からしても、規範倫理学上の考察おいて、ブラックバーンが動機に着目する意義があると論じる。